

令和元年度 文部科学省  
「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業

共生社会の実現に向けた、知的障害者等への  
生涯学習プログラムの実践研究  
～大学との連携による「インクルーシブな学び」創成の試み～

【報告書】



(ゆたかカレッジと相模女子大学の学生作品より)

令和2年3月

株式会社ゆたかカレッジ横浜キャンパス



## 共生社会の実現に向けた、知的障害者等への

### 生涯学習プログラムの実践研究

#### ～大学との連携による「インクルーシブな学び」創成の試み～

## 目 次

株式会社ゆたかカレッジ代表取締役社長あいさつ	1
第1章 事業計画	2
第2章 事業概要	5
第3章 連携協議会	8
第1節 連携協議会の概要	
第2節 連携協議会の記録	
第4章 学習プログラム開発	23
第1節 インクルーシブ・ゼミ	
第2節 インクルーシブ・出前講座	
第3節 インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）	
第5章 総合まとめ	71
第1節 成果	
第2節 課題	
資 料	74
①事業概要ポンチ絵	
②視察報告	
③インクルーシブ・ゼミ指導案	
④パーソナルポートフォリオ書式	
⑤成果報告会ちらし	
おわりに	95

## 事業推進者代表挨拶

「令和元年度 障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業がまもなく終了しようとしています。文部科学省、相模女子大学並びに、連携協議会メンバー等関係者の皆様のご指導ご支援のおかげをもちまして、本日無事、成果報告会を開催することができますこと、心より厚くお礼申し上げます。

国連の障害者権利条約で障害者の生涯学習の機会を確保することが強調され、わが国においても学校卒業後の学びをしっかりと保障していくための多様な取り組みが実施されています。そうした中、文部科学省が取り組んでいる「障害者の多様な学び場づくり」のなかで、ゆたかカレッジの取り組みは、学校卒業後の社会への移行期の学び場づくりです。

去る12月6日（金）、私は相模女子大学で行われた第7回インクルーシブ・ゼミの様子を見学しました。インクルーシブな学びを実現するため相模女子大学と連携し、ゆたかカレッジ横浜キャンパスの学生たちと相模女子大心理学ゼミの学生たちがいっしょに学ぶ取り組みです。ゼミで交流しながら、自己分析・自己理解や他者理解につなげていきます。

相模女子大の学生たちとゆたかカレッジの学生たちとの自然な形でふれあいは、とても心温まる光景でした。そこには、5月から概ね月1回のペースで開催された交流の中で培ってきた相互の信頼に基づく関係性があるのだろうと容易に想像がつかしました。

何より参加者一人ひとりの自己開示がすごく素敵だなと思いました。自分をさらけ出し、それに対し、周囲の人たちが間髪入れずポジティブな言葉で反応する。そこには、この集団はありのままの自分を受け入れてくれるという空気が漂っており、それぞれの学生たちがここは自分の居場所だと実感できているのだと感じ取れました。これはもしかしたら、一般の大学生と知的障害の青年たちが混ざり合う中でこそ起きた化学反応なのではないかという気がしました。

障害のある学生のみならず、子どもから大人へ、他律から自律への移行期にある大学生たちもそれぞれに青年期特有の悩みや葛藤を抱えています。交流で自己開示をしたり自分を分析したりするなどの活動を通じて、大学生たちも変わっていくというプロセスは非常に興味深いものでした。

今後もゆたかカレッジとして、インクルーシブな学びの実践を積極的に推進していき、この国の知的障害を持つ人たちの人生の質の向上に貢献していきたいと考えています。

引き続き、皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

令和2年3月

株式会社ゆたかカレッジ  
代表取締役 長谷川正人

# 第1章 事業計画

本実践研究は、ゆたかカレッジ横浜キャンパスと相模女子大学が連携・協働で、文部科学省総合政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室より公募された令和元年度「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業に応募し、採択された事業として、推進してきた。

本章では、文部科学省に提出し、採択された企画提案書をもとに、実践してきた事業計画内容を紹介する。なお、一部計画段階のまま記述されているところもあり、実際と異なる内容も含まれていることをあらかじめお断りしておく。特に、学習プログラムの開発についての詳細は第4章の「学習プログラム開発」を参照されたい。

## 1. 事業の題名

文部科学省総合政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 障害者学習支援推進室  
令和元年度「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業

共生社会の実現に向けた、知的障害者等への生涯学習プログラムの実践研究  
～大学との連携による「インクルーシブな学び」創成の試み～

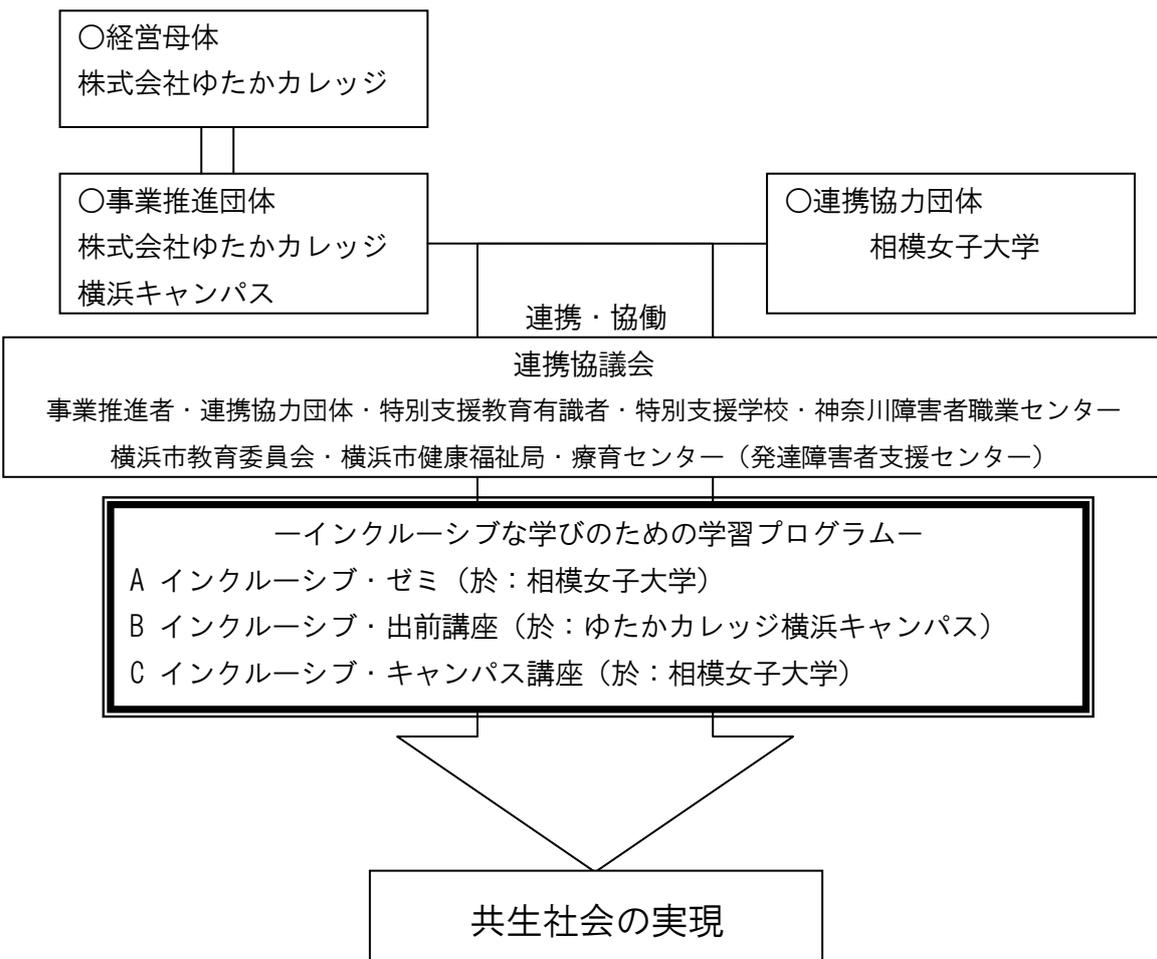
## 2. 業務の委託期間

2019年5月24日から2020年3月10日（火）まで

## 3. 事業の実施に係る全体像

（紙面の都合により次ページより）

○事業全体像の図示



障害者権利条約の24条にも示されているとおり、一般の人たちと障害者がともに学ぶ機会はとても大切である。しかし、知的障害者等は、後期中等教育を修了後、学ぶ機会は極端に少なくなる。まして、一般の人たちと一緒に学ぶ機会はほとんどない。高等教育段階においても、共に学ぶことで、相互理解が進み、共生社会の実現につながるものと考えている。加えて、知的障害者等には、生涯学習の機会（高等教育を含む）を保証し、社会の中での生きる力や人間力をさらに高めることで、社会に貢献できる人材になって欲しいとも考えている。

本実践研究事業では、大学との連携・協働を通して、知的障害者等が同年代の大学生と共に学ぶことで、キャリア発達を促し、社会で自信をもって生きていくことができるようになることを目指したい。そのために、本事業では大学と連携したインクルーシブな学びを実践する方法として、次の3つの学習プログラムを開発する。「A インクルーシブ・ゼミ」「B インクルーシブ・出前講座」「C インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）」である。

今回、相模女子大学との連携にあたり、大学としての協力体制を構築した上で計画している。A インクルーシブ・ゼミは相模女子大学「子育て支援センター(大学内の臨床センター)」の事業として開催する。C インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）は、大学主催の市民公開講座の枠組みにおける、発達障害の特性を持つ若者対象の講座シリーズとし

て開催する。なお、大学内の臨床センターや大学主催の市民講座は、多くの大学においてすでに設置されており、この枠組みを用いることによって、他大学への普及が促進されやすいのではないかと考えている。

これら3つの学習プログラムの試行を通して、知的障害者等が生きる力を確実に高め、個々の人間力を高めることで、自己実現を果たしていく。インクルーシブな学びは、彼らの将来の就労生活を豊かにし、共生社会の実現に貢献できると考えている。

【成果普及や予想される成果に関する評価】

1. 研究に参加するカレッジ学生における社会的能力や精神的満足度やQOL等の評価

・カレッジ学生が社会人として人間力が高まって、社会貢献できる資質能力を身につけたかを評価する。本人の社会的能力や精神的な満足度、生活の質（QOL）向上などを効果指標と考え、聞き取りや質問紙調査の他、発達検査キットを用いた個別の評価を行う計画である。

2. 研究に参加する大学生や大学教員における障害者に対する理解や合理的配慮に関する意識調査

- ・本事業を通して相模女子大生の障害者に対する理解の深まりに関する意識調査を行う。
- ・相模女子大学教員の特別支援教育に関する理解の深まりや、通常の講義の中で合理的配慮への意識、障害特性を理解した授業方法の工夫に関する意識調査を行う。
- ・以上の意識調査は、アンケートおよび聞き取りを通じて行う。

2. 大学との連携・協働によるインクルーシブ教育に関する社会的評価及び普及

- ・横浜市教育委員会や横浜市健康福祉局を対象に事業報告を行い、本事業に対する社会的評価を得ると同時に、今後の知的障害者等の生涯学習の在り方について検討を要請する。
- ・植草学園大、横浜国大、明治学院大学、帝京大学等の特別支援教育に関する講座の教授らを対象に成果報告書を送付し今後の連携の可能性を探る。

## 第2章 事業概要

ここでは、3つの学習プログラム開発の事業概要について紹介する。先にも述べたが、本報告書原稿締切り後に実施されるプログラムも一つ残っており、その内容等については、時間の関係でこの報告書に反映させることはできなかった。あらかじめご承知おきいただきたい。

以下、学習プログラムのスケジュールと概要を紹介する。

### 1. 事業内容

#### (1) 学習プログラムのスケジュール

	A インクルーシブ・ゼミ	B インクルーシブ・出前講座	C インクルーシブ・キャンパス講座 (さがみアカデミー)
4月			
5月	第1回 24日(金)		
6月	第2回 21日(金)		
7月		①16日(火)②30日(火)	
8月		③④ 6日(火) ⑤⑥20日(火) ⑦⑧23日(金)	
9月	第3回 27日(金)	⑨17日(火)	第1回 21日(土)
10月	第4回 25日(金)		第2回 26日(土)
11月	第5回 8日(金) 第6回 22日(金)		第3回 22日(土)
12月	第7回 6日(金)		第4回 21日(土)
1月		⑩21日(火)	
2月			第5回 1日(土) 第6回 29日(土)

※B インクルーシブ・出前講座について、③④、⑤⑥、⑦⑧と記述しているのは、同日に横浜キャンパス内の違うクラス（午前・午後）で出前講座を実施したことを意味している。

#### (2) 学習プログラムの概要

##### A インクルーシブ・ゼミ

・大学で、知的障害者等と大学生がともに学ぶ機会を設けることで、高等教育における交流及び共同学習の在り方を検討する。お互いがお互いの理解を深め、授業だけでなくキャンパスライフを共有することで、これから社会で生きていくためのライフスキルを獲得したり、コミュニケーションの仕方やマナー等についても学ぶことができたりすると考えている。授業は心理学のゼミを想定し、相模女子大学の教員とゆたかカレッジ横浜キャンパスの教員が共同で年間10回程度授業を行う。場所は、大学のゼミ室を使用する。毎回、授業終了後に

知的障害者等とゼミの大学生にふり返りアンケートを実施し、インクルーシブな学びについて効果検証を行う。

インクルーシブ・ゼミは同大学子育て支援センター2019年度事業計画として同センター会議で承認されており、同大学人間心理学科の学生7名程度が参加予定である。春期（前期）には、相互理解と共感関係の形成を目的に構成的エンカウンターを行う。秋期（後期）には、まず「ピアヘルピング」の授業により学生同士で傾聴スキルを体験的に学んだ後、自分の得意・不得意・好き・嫌いなどを互いにふり返り、傾聴し合うことを通じて、より深い自己理解を目的とする「当事者研究」の授業を行う。日程及び内容は以下の通りである。

春期		
5月24日	オリエンテーション	相互理解・共感関係の形成
6月21日	構成的エンカウンター	相互理解・共感関係の形成
秋期		
9月27日	ピアヘルピングとは	傾聴スキルの習得
10月25日	当事者研究とは、グループワーク	自己開示とふりかえり
11月8日	グループワーク	自己開示とふりかえり
11月22日	プレゼンテーション制作	当事者研究のまとめ
12月6日	プレゼンテーション	当事者研究の発表

#### B インクルーシブ・出前講座

・大学等の教員を「ゆたかカレッジ横浜キャンパス」に派遣し、各教員の専門分野を活かしたテーマで、わかりやすく講義を中心とした授業（講座）を行う。年間10回程度講義回数を想定している。知的障害者等は各専門分野に対して興味関心を高め、社会で生きていくための教養を身につけることができる内容を考えている。毎回、授業後には、知的障害者等にアンケートを実施し、どんな学びを習得できたか確認し、それを講師に返していくことで、授業の方法について検証する一助とする。また、大学等の教員は、一般的に知的障害や発達障害に対する理解や経験が不十分である場合が多いため、出前講座にゆたかカレッジ横浜キャンパス側のコーディネーターや指導者又は特別支援教育の専門家が参加し、障害特性や学習スタイルに関する助言や、彼らの深い学びにつながるに相応しい授業の在り方（アクティブラーニング）についてスーパーバイズを行うなど、出前講座の質を高める工夫を行いたい。さらに、各講義を担当する大学教員のゼミの大学生にも参加してもらい、ゆたかカレッジ横浜キャンパスの場でも共に学ぶ機会にできたらと考えている。

2019年3月に、同大学人間心理学科の教員有志への説明会を行い、研究協力者である日戸以外に3名の教員から参加希望を受けている。

#### C インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）

・知的障害者等（発達障害者を含む）にとって興味・関心の高そうな講座を年間6回程度設定し、障害の有無に関係なく一般市民（若者）に向けて広く参加者を募り、参加者がともに学ぶ機会を設ける。参加者全員が学ぶことの素晴らしさや学ぶ楽しさを実感することで、イ

ンクルーシブな学びの推進を図る。参加者は小学生以上とし広く周知する他、横浜キャンパスの学生や通級指導教室を利用した又は利用している者にも案内を周知し、参加者を募る工夫をしていく予定である。本講座の講師は、障害特性を理解している特別支援教育の専門家や大学の教員等を考えている。場所は、大学の講義室を使用する。毎回、参加者に対して講座終了後に講座内容のアンケートを実施し、学びの内容を検討する。

この講座は、相模女子大学スタッフとゆたかカレッジスタッフとの共同企画であることも含めて、同大学の会議で承認されている。日程及び内容は以下の通りである。

9月21日	「生き物大好き！ 私のペット遍歴」 (杉山 明／横浜市立市ヶ尾小学校校長)
10月26日	「もうすぐ必修化 プログラミングを楽しく学ぼう」 (岡田克己／横浜市立仏向小学校教諭)
11月22日	「秘伝！ コレクション整理・活用術」 (近藤幸男／横浜市立鴨志田中学校主幹教諭)
12月21日	「鉄道を見るマニアの目・プロの目」 (湧口清隆／相模女子大学教授)
2月1日	「感情を生み出す“脳の不思議”」 (米田英嗣／青山学院大学准教授)
2月29日	「宇宙人類学講座—MESOPOTAMIA—」 (綿貫愛子／NPO 法人東京都自閉症協会役員)

## 第3章 連携協議会

本事業を円滑に推進していくために、連携協議会を設置した。協議会の構成員には、行政、教育、福祉、労働、から幅広くお招きすることができた。転勤や仕事の都合で全員出席の会は一度もなかったが、本事業に対して率直にご意見をいただくことができた。この後の連携協議会の議事録を参照されたい。なお、10月12日に予定していた第2回連携協議会は関東地方に台風が接近しつつあったので、交通機関の影響を鑑み中止とした。

以下、連携協議会の構成員と主なスケジュール・内容について報告する。

### 第1節 連携協議会の概要

#### (1) 連携協議会の構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
菊地 一文	弘前大学大学院教育学研究科 教授	
岡田 洋一郎	相模原市立療育センター陽光園 所長	
佐渡 美佐子	横浜市健康福祉局障害企画課 課長	
須山 次郎	横浜市教育委員会特別支援教育課 課長	
村山 小百合	横浜市立日野中央高等特別支援学校 校長	
工藤 幹夫	神奈川障害者職業センター ジョブコーチ	
瀧田 美紀子	横浜市立盲学校 副校長	
本橋 明彦	相模女子大学事務部 部長	
有田 雅一	相模女子大学夢をかなえるセンター 部長	
日戸 由刈	相模女子大学人間社会学部 教授	

#### (2) 連携協議会事務局構成員

氏名	所属・役職等	備考欄
長谷川 正人	株式会社ゆたかカレッジ 社長	
川口 信雄 (コーディネーター)	株式会社ゆたかカレッジ 顧問	
小林 靖	株式会社ゆたかカレッジ 横浜キャンパス学院長	
瀧野 由梨	株式会社ゆたかカレッジ 横浜キャンパス支援教員	(9月まで)

#### (3) 連携協議会スケジュール

4月	
5月	連携協議会準備・打ち合わせ
6月	連携協議会準備・打ち合わせ
7月	第1回 連携協議会（障害者の生涯学習講演、事業説明と年間計画案）
8月	・行政機関への挨拶と事業説明

9月	
10月	第2回 連携協議会（事業の進捗状況とLD学会自主シンポジウム企画案提示）中止
11月	中間報告会（LD学会自主シンポジウムにて）
12月	第3回 連携協議会（インクルゼミ見学と意見交換）
1月	
2月	第4回 連携協議会（事業成果まとめ報告案提示）
3月	成果報告会、・成果報告書提出・関係団体等へ配布

#### （4）連携協議会の内容

- ・詳細は2. 連携協議会の記録を参照されたい。

<p>第1回 連携協議会（7月下旬頃：7月25日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業のねらいとその内容説明、年間の活動計画案、連携する大学からの意見聴取</li> </ul> <p>第2回 連携協議会（10月初旬頃：10月12日）→中止</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事業の進捗状況説明、出前講座の実践報告（現時点での成果と課題）、日本LD学会自主シンポジウムの企画・発表内容提示</li> </ul> <p>第3回 連携協議会（12月中旬頃：12月6日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・インクルーシブ・ゼミ見学と実践報告、LD学会自主シンポジウム報告、意見交換</li> </ul> <p>第4回 連携協議会（2月下旬頃：2月22日）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各プログラム等の状況報告、最終報告会に向けての内容提示、成果報告書案の提示、</li> <li>・意見交換</li> </ul>
---

## 第2節 連携協議会の記録

### 第1回 連携協議会

日時：令和元年7月25日 18時～  
場所：ゆたかカレッジ横浜キャンパス

## 「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

### 第1回 連携協議会

#### 次 第

- 1 事業推進者代表挨拶
- 2 連携協議会委員 自己紹介
- 3 文部科学省事業行政説明・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料1
- 4 ゆたかカレッジ横浜キャンパス概要説明・・・・・・・・・・ 資料2
- 5 横浜キャンパス本事業取組説明・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料3
- 6 質疑応答
- 7 事務連絡

## 第1回 連携協議会議事録

- 会議名 第1回連携協議会
- 開催日時 令和元年7月25日(木) 18:00~20:00
- 開催場所 ゆたかカレッジ横浜キャンパス
- 作成日 令和元年7月26日
- 作成者 瀧野由梨

### 1 参加者

峰氏(文部科学省)・岡田 洋一郎氏・須山 次郎氏・佐渡 美佐子氏・村山 小百合氏・  
工藤 幹夫氏・瀧田 美紀子氏・本橋 明彦氏・日戸 由刈氏  
事務局:川口信雄、小林 靖、瀧野由梨

### 2 欠席者

菊地 一文氏、有田 雅一氏

### 3 議題

・ゆたかカレッジ横浜キャンパスの本事業取組について

### 4 配布資料

資料1:「文部科学省事業概要」

資料2:「ゆたかカレッジ横浜キャンパス概要」

資料3:「横浜キャンパス本事業取組」

### 5 議事内容・意見交換

○冒頭、社長の代理で横浜キャンパス学院長小林が連携協議会委員のみなさんに委員の就任と本日の出席について感謝の言葉を述べた。そして、本事業について忌憚のない意見交換をお願いした。

○委員による自己紹介を行った。

○文部科学省より「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業について行政説明をしていただいた。

○横浜キャンパスより、ゆたかカレッジと横浜キャンパスについて概要を説明した。

○横浜キャンパスと相模女子大学の連携・協働による共生社会の実現に向けた、知的障害者等への生涯学習プログラムの実践研究~大学との連携による「インクルーシブな学び」創成の試み~について概要を説明した。

○大学との連携事業について

・将来的に全国の大学でできるようになれば、と考えていると思うがいろいろな大学でやれそうか?どんな点が必要になりそうか?

→さがみアカデミーや出前講座のやり方が入りやすいがインクルゼミとしてやることは難しいと考えている。こういうやり方もあるのだなと大学側に感じてもらいたい。

・出前講座がまず難しいと感じているがどうか?一般的に言えば、大学の先生は知的障害者や発達障害者を教えることは難しいと思う。

→説明会を開いて、賛同者を募っていく。アカデミックな雰囲気をも味あわせてほしい、カレッジ

側でサポートする、一緒にしましよと話す。

・大学の事務方が連携していただけることが大きい、感謝している。

→地域の中で大学がどう機能するか考える良い機会となった。相互交流する中で違う環境で学ぶことで学生が輝いて見える。連携する意義が感じられているからこそ必要であると思う。大学で働く者の意識改革をしてほしいと思っている。学長も相模女子大学でできることに協力していきたいと考えている。

・大学で学ぶことへの魅力はあるが特別支援学校の中で大学には行けないと刷り込みみたいなことが起きている現状があり、大学で学びたいと意識を持つ学生がまず少ない。その中でこの取り組みをしていることは、大学へ近づいていくプロセスとしてはありがたいし、高等部でもそのような道があることを教えていかなければいけないと思う。純粋にどの生徒にも学びたいという気持ちは育てていく必要がある。この制度は福祉でなく、教育でやっていかなければいけないのではないかと感じた。

・ハローワークにくる若者の中に有名な大学を卒業しているが、就労できていない方が多い。何が必要であったのかを学びなおす必要がある。本人が希望すれば、すぐに就職するのではなく学ぶことを進めていくことも大切であると感じた。特別支援学校高等部からすぐ就労につなげなければいけないというわけではない。共生社会を目指して色々なところにカレッジの取り組みを発信して、みなのが付きになればよいと思う。期待している。

・多様な学習活動について、同年代の人とのふれあう、互いを意識しあうなど聞いて思うことがある。某特別支援学校では通常の学校(近隣の一般高校)とのコラボレーションを計画し始めている。大学からだけではなく、もっと早い段階で取り組んでいく必要があるのではないかと思う。学位が欲しいわけではなく、大学という環境で、高校という環境で学ぶということが大事なのではないかと考えている。生徒が学びたいと言った時にどのように説明していくのか、今は大学にいけるシステムはないため考えて行かなければいけない。

・福祉の限界だと感じている。サービスの措置決定を判断するのは市町村である。本人が希望をしても決めるのは福祉行政の担当者である。ゆたかカレッジの理念には大変共感するし、40代以上の人でも学びたかった、まだ学びたいと思っている人はたくさんいる。ゆたかカレッジの理念に大学が賛同することはとても面白いが、福祉のサービスの中で取り組んでいくことが良いのか？ 高等教育の中ですることが望ましいのか？ 福祉でこれを作り上げることには限界があるのではないか？ 教育の中でやっていく必要があるのではないか？ 在り方についての検討が必要だと思う。

・海外の大学での入学は入試制度なのか？

→学位は与えられないが、入学して共生の効果を重視している大学もある。また大学での学びは福祉の職員がライフスキルを教えて、芸術やスポーツは大学の雰囲気を感じられる中で取り組んでいる大学もあり、大学によって違う。

・日本は、なぜ今このような状況なのか？なぜ海外より遅れているのか？

→韓国やアメリカ合衆国はかなり進んでいる方である。日本は入試制度が大きな障壁になっている。学費の面などもある、それだけのモチベーションを持った職員がいる大学ばかりではない。

○プログラムの汎用性について

・成果を打ち出していくためにわかりやすい指標が必要であると思う。カレッジ単独で考えるというよりは、文部科学省から他の事業を見てこの観点を付け加えるということはあるか？

→数字的なものとしてアンケートの評価が今は大きい。現状では難しいと思うが事業に関わっている方以外(地域の方など)からの指標をとることができると思う。行政としてもそのようなものを求めているところもある。

・現場での声を届ける。それぞれの機関との橋渡しとなる。それが療育センターなどの役割のかなと考えている。自分の特性を知った上での学びの場を提供していることは素晴らしい。保護者にも体験してもらえて、知ってもらえる場を用意してもらえるといいと思う。

○次回の連携協議会等について事務連絡を行い、閉会とした。

第2回 連携協議会（台風接近のため中止）

日時：令和元年10月12日 16時～

場所：ゆたかカレッジ横浜キャンパス

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

第2回 連携協議会

次 第

- 1 事業推進者代表挨拶
- 2 講演「障害者の生涯学習」・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1  
講師 神戸大学大学院人間発達環境学研究科  
教授 津田 英二 様
- 3 実践研究進捗状況説明
  - ・インクルーシブ・ゼミ（インクルーシブ教室）・・・・・・・・・・資料2
  - ・インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）・・・・・・・・資料3
  - ・インクルーシブ出前講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料4
- 4 質疑応答
- 5 事務連絡
  - ・文部科学省主催ブロック別コンファレンスについて
  - ・LD学会第28回大会（東京）自主シンポジウム  
タイトル「共生社会の実現に向けた知的障害者等への生涯学習プログラムの実践研究」  
日時：11月9日（土）12時35分～14時05分  
場所：パシフィコ横浜会議センター4階 413
  - ・次回 第3回連携協議会について  
12月 6日（金）10時30分～ 於：相模女子大学

### 第3回 連携協議会

日時：令和元年12月6日 10時30分～

場所：相模女子大学 8号館834教室

## 「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

### 第3回 連携協議会

#### 次 第

- 1 事業推進者代表挨拶
- 2 インクルーシブ・ゼミについて
- 3 インクルーシブ・ゼミ意見交換
- 4 LD学会自主シンポジウム（中間報告）報告
- 5 事務連絡（今後の予定）
  - ① 共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 関東甲信越ブロック  
日時 令和2年2月14日（金）10時～17時  
場所 東京大学（本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター等）
  - ② 第4回 連携協議会  
日時 令和2年2月22日（土）14時00分～15時30分  
場所 ゆたかカレッジ横浜キャンパス
  - ③ 成果報告会  
日時 令和2年3月7日（土）13時30分～16時30分  
場所 タイムシェアリング新横浜B（貸し会議室）

資料

### 第3回 連携協議会議事録

- 会議名 第3回連携協議会
- 開催日時 令和元年12月6日(金) 10:30~13:00
- 開催場所 相模女子大学 8号館834教室
- 作成日 令和2年1月7日
- 作成者 小林 靖

#### 1 参加者

岡田 洋一郎氏・村山 小百合氏・工藤 幹夫氏・瀧田 美紀子氏、本橋 明彦氏（途中退席）・日戸 由刈氏（途中退席）

事務局：長谷川正人、川口信雄、小林 靖

#### 2 欠席者

菊地 一文氏、須山次郎氏、佐渡 美佐子氏、有田 雅一氏

#### 3 議題

インクルーシブ・ゼミ取組みの実際について

#### 4 配布資料

資料 「共に学び、生きる共生社会コンファレンス（ちらし）」

#### 5 議事内容・意見交換

○今回の連携協議会は、インクルーシブ・ゼミの実際を参観するところから始まった。(10:40~12:00)

○協議会の冒頭、株式会社ゆたかカレッジ社長より日頃の取組みに対して、感謝の挨拶をいただいた。

○ゆたかカレッジ担当者より本日見学した「インクルーシブ・ゼミ」の概要について、パワーポイントを使って説明した。

○参観者意見・感想

・同世代にしかできないことがたくさんある。サガ女の学生はいったって普通の学生、将来の市民になって普通に地域で暮らしていく。あのような場があると色々な悩みを持っていることを出してくる、まだまだ大学もスルーしてしまっていて、丁寧に相談をやっていく必要があると反省している。

・教室の中に自己開示できる環境ができています。現在、ジョブコーチとして支援しているのは20代から50代までいて、40代半ばくらいが中心の人たちである。その人たちは、有名な大学を出ているが精神障害になり結果的には発達障害があったとわかる人が多い。人間関係でつぶれてしまい、働きづらくなってしまう方ばかり。この大学生の時期にこのような取組みができるのは本当に素晴らしいと思う。特別支援学校ではできにくい取組みである。共感的に人の悩みを自分事として考え、色々な発見がある。

・学校でやっていることは間違っていないと再認識できた。生徒たちは一度学んだことでも忘れる。今日のゼミも何回かやる中で深まっていったり、主体性ができたりしている。特別支援学校高等部を卒業しても学びたい生徒がいる。学ぶことが楽しいと言っている生徒がいる。色々な選択肢があるがその中から選ぶのも難しい、一緒にこうしたらこうなるということを考えていき

たい。知的障害者に大学の学びは開かれているのか、このような場は大変貴重であると思った。

・久しぶりに若い学生と対話できて良かった。同年代でなければできないということを強く思った。学生より倍以上長く生きてきてその経験からアドバイスはできるが、あのメンバーだからこそ絶対できることがある。同じ時代と一緒に生きているからこそ、共有共感してその中から新しい視点を与え合う、そういう関係性がすごくあったと思う。たった7回で垣根が低くなった、7回でこうなるのかということをしごく感じた。以前、進路を担当していたので卒後支援の重要性を考えると今の高等部3年の教育を変えなければいけないと思っている。日常的なたわいもないようなことでも共感しあえる関係性がこれからの共生社会の基盤になるのかなと思った。

・両方の学生が心の中にかかえている混沌としたものを素直に表現できたのかなと感じた。出てきたものは双方乖離がない。悩んでいることは大きく違わない。それをきちんと表現できたことが両者にとって良かった。自分や他者を理解してもらおうということ、そういう経験ができたことは良かった。学生の表情にも出ていた。療育システムを考えていく上で、ライフステージの中で考えていく必要があると感じた。共生社会を考える場合、福祉の中で考える場合と教育の面から考える場合があると思っている。

○第28回LD学会(東京大会)自主シンポジウムにて、本事業の中間報告として実践発表を行い、フロアから、素晴らしい取り組みであり最終報告に期待する意見をいただいたことをお知らせした。

○「共に学び、生きる共生社会コンファレンス in 関東甲信越ブロック」「第4回連携協議会」「成果報告会」について事務連絡を行い、閉会した。

## 第4回 連携協議会

日時：令和2年 2月22日 14時～

場所：ゆたかカレッジ横浜キャンパス

### 「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

## 第4回 連携協議会

### 次 第

- 1 事業推進者代表挨拶
  
- 2 実践研究成果報告  
○成果報告書（案）冊子・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料  
・インクルーシブ・ゼミ（インクルーシブ教室）  
・インクルーシブ出前講座  
・インクルーシブ・キャンパス講座（さがみアカデミー）
  
- 3 意見交換
  
- 4 事務連絡  
・成果報告会について 3月 7日（土）13時～16時30分  
於：タイムシェアリング新横浜B

## 第4回 連携協議会議事録

- 会議名 第4回連携協議会
- 開催日時 令和2年2月22日(土) 14:00~16:45
- 開催場所 ゆたかカレッジ横浜キャンパス
- 作成日 令和2年2月24日
- 作成者 小林靖

### 1 参加者

菊地一文氏・佐渡美佐子氏・須山次郎氏・村山小百合氏・工藤幹夫氏・瀧田美紀子氏  
事務局：長谷川正人・川口信雄・小林靖

### 2 欠席者

岡田洋一郎氏・本橋明彦氏・有田雅一氏・日戸由刈氏

### 3 議題

・委託事業の成果報告及び委員との意見交換

### 4 配布資料

資料：「成果報告書(案)」

### 5 議事内容・意見交換

○冒頭、株式会社ゆたかカレッジ・長谷川社長より、委託研究に関して委員の皆様からの忌憚のない意見をいただきたいとの挨拶から始まった。

○各事業担当者より、パワーポイントを使って実践研究の成果報告を行った。

(1) インクルーシブ出前講座(小林)

(2) インクルーシブ・ゼミ(インクルーシブ教室)(川口)

(3) インクルーシブキャンパス講座(さがアカデミー)(川口)

○委員からの質問・意見

#### 【インクルーシブ出前講座について】

・A、Bのクラス分けの観点はどのようなものか。

⇒知的障害の程度や個別的な対応が必要かどうかという観点で分けている。

・計画書にプログラム開発とあるが、高等教育の枠組みとしてどのように考えるか。報告からは、高等部の教育を拡大したというように感じる。

⇒福祉でやるべきことか、般化するにはどのようにしたらよいかなども含めて、その点は、後半のところでも議論したい。

#### 【インクルーシブ・ゼミについて】

・インクルーシブは幼少期からということをよく聞くが、報告からは早期からの取組の重要性だけでなく、各発達段階に応じた取組が必要と感じた。

・インクルーシブ・ゼミの取組の中で、カレッジ生、サガジョ生の双方に変化が見られた。プログラム開発という点で、どのようなことがこのダイナミズムを生み出しているのかを明らかにしていく必要がある。先日、小学校の二分の一成人式に参加した時、「医者になりたいから大学に入る」という子どもと、「漁師になりたいから体力をつけたい」という子どもがいた。「何になりたいか」だけでなく、「そのために何が必要か」ということに深まっていくことは重要だが、

インクルーシブ・ゼミではアドバイスし合うことによってその深まりがあったように思う。それは、カレッジ生とサガジョ生という組み合わせなのか、プログラム構成なのか。

⇒今回のインクルーシブ・ゼミの取組の中では、その都度、やりながら考えていくという教師のやり方、ヒデュン・カリキュラムのようなものなのでプログラム化しにくいところがあると思う。誰にでもできるようにしていきたいが、別な人がやった場合、同じような成果になるかわからない。

- ・インクルーシブ・ゼミの第7回に参加したが、司会をしていたサガジョ生が、共感性が高くて参加者の関係をうまく作っていった。このサガジョ生もインクルーシブ・ゼミに参加していく中で変化があったのではないかと思う。同じ世代の人たちが知り合って、共感し合いながら、キャリアを考えていくということができた、よいプログラムだと思う。
- ・汎用性という意味では、共学と女子大での違いがあるのではないか。  
⇒共学の方がよいと思う。でも今回、相模女子大で実践したことはよかった。学生が個性的だった。国立大学が関わってくるとよいが。神戸大学は実践している。
- ・各大学の組織の中で、特別支援教育の講座がどのような位置づけになっているかによると思う。また、プログラム化することで、大学も受け止めやすくなるのではないか。さらには大学のカリキュラムの中にどのように位置付けていくかということだと思う。
- ・今回の実践から得られたことをまとめると、次の3点になるのではないか。

#### ①知的障害のある人の高等教育の可能性

学習指導要領の中で各段階間の連続性が示されたが、あの膨大な内容を高等部卒業までに履修させられるのかは、まだ誰も検証していない。特別支援学校でその点を検証していくということも考えられる。

#### ②大学でのカリキュラムの可能性

これまで特別支援学校が担ってきた青年学級と近いが違うものとして、多様なプログラムをどのように構成してカリキュラム化していくか。ゼミは比較的取り組みやすいと思う。大学は高校までよりもカリキュラムの自由度が高い。まずはシラバスのようなものを作ってみてはどうか。また、立場の違う人が同じ場で学んでいるが、その目標が違っているということはある。「3つのポリシー」〔学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）〕を踏まえたカリキュラム編成が必要。

#### ③異なる者が学び合う効果

双方の変化を、今後、データ処理して研究として進めていくということも考えられる。

- ・文部科学省は、今回の研究事業で何を求めているのか。  
⇒・障害者権利条約での高等教育の保障を考えていると思う。海外でも学科を設置しているのはナザレ大学のみ。今回の取組が全国に般化されていくとよいと思う。
- ・文科省としては、確かに障害者権利条約に掛かる部分を求めていると思うが、障害者福祉のアプローチではない形で進んでいって欲しい。
- ・福祉でやっていくのは難しいと感じる。学びを保障するという点での人材確保が難しいし、福祉ではフィットしない。
- ・学費をとっていいのではないかと思う。福祉の制度ではなく、学校として成立する仕組みを考えた方がよい。

- ・場を一緒にすればいいというのではなく、その先を目指したい。
- ・高等部の延長（専攻科）なのかという点もある。モデル事業で検証しているところではないか。
- ・知的障害のある人の高等教育を考えることは、高等部卒業後の学びを保障するというだけでは意味があると思う。
- ・サガジョ生の成長が見られた。リーダー性を発揮してきた学生もいる。3月7日の報告会では実際に双方の学生に語ってもらう。他の大学には「(大学にとっても) やらないと損」ということを伝えたい。

⇒障害のある人に関わってきた人たちにはわかるが、そうでない人たちにどのように発信するかを考えていきたい。

#### 【インクルーシブキャンパス講座について】

- ・参加者の感想で、「世界が広がった」というものが多く、それを嬉しく思う。何歳になっても学び続けられる場は必要だと思う。
- ・どのようにして若者の参加を増やしたのか。  
⇒本人が参加したいということが少ないため、保護者が行かせたいと思うようにするため、「就労」に関するコーナーを入れた。また、関係者のセミナーで広報するなどした。

#### 【モデル事業全体を通して】

- ・知的障害のある40代の友人がいるが、学校では就労するためのことは教えてもらったが、本当はもっと学びたかったと言っていた。その話から、知的障害のある人が学ぶ場づくりができればと思って参加していた。インクルーシブ・ゼミの報告では、双方にとってよいという話があったが、高等教育だけでなくどの年代でも言えるのではないかと思う。
- ・教育としてどこまで取り組めるのかということだと思う。インクルーシブ教育について、高等教育でも進めていくということ国からも発信してもらえるとよい。
- ・学校現場の声が届くとよいと思う。今年度の高等特別支援学校で知的障害のある在校生の中で、高校を受検しなおした生徒がいる。でも、本人が求めているのは高校の教育なのかと感じた。ある生徒は、整備士になりたいのだが、整備士の専門学校に入るためには高校卒業の資格が必要だから高校に入りなおす。でもそれでよいのかと感じた。知的障害のある人の高等教育について、このような実際の子どもたちが直面している状況を知ってほしい。
- ・知的障害のある人には、高等部卒業後の学びの場が十分に保障されていないと思う。18歳から働きたいと思う人もいるなど、多様なニーズに応えられるよう、例えば、「インクルーシブキャンパス講座」のようなりカレント講座のようなものがあり、そこからもっと学びたいと思ったら「インクルーシブ・ゼミ」のようなものへ、その先には神戸大学の取組のようなものがあるなど、様々なルートを用意できたらと思う。また、「インクルーシブキャンパス講座」では、大学教員の専門的な話の中で質問が多かったというときもあったと報告があったが、知的障害のある人も専門的なことを求めているということだと思う。ぜひ、大学教員には積極的に知的障害のある人の学びに参画してほしい。そのことが今後の大学での教育に生かされると思う。
- ・大学では発達障害や精神障害の方の入学が増え、その対応の追われていて、さらに知的障害の人を受け入れることが難しいということがあるのではないか。視覚、聴覚障害の生徒を大学に受け入れてもらうのに30年かかったが、今後、知的障害のある生徒の受け入れまでに何年かかるのかと思う。また、現在は後期中等教育段階での知的障害児の進路は選択肢が増えてきた。

高等教育の前に、教育の中でどのように準備をしていくのかということもあると思う。今、ジョブコーチをしているが、有名大学卒でも就労ではうまくいかない人も多い。その点では「自己開示」の重要性も感じる。今回の取組で活用された「自分のトリセツ」のようなものを年齢の低いときから自然に出し合っていくことができるようになればと思う。

- ・改めて、なぜ、何のためのモデル事業なのかと考えた。主語は「当事者」であり、「当事者」のための事業である。「総合的に」ということは、どこかの機関だけが取り組むということではなく、様々な機関が連携してということだと思う。総合的に生み出していけるような関係構築が大切ではないか。また、「誰もが、いつになっても学べるように」ということもあるので、多様な主語も考えられるのでは。

○長谷川社長より、委託事業についての総括と今年度で終了となることをお知らせした。

○3月7日の報告会についての事務連絡を行い、閉会した。

## 第4章 学習プログラム開発

第1節 インクルーシブ・ゼミ

第2節 インクルーシブ出前講座

第3節 インクルーシブ・キャンパス講座

ゆたかカレッジと相模女子大学のインクルーシブプロジェクト  
(文部科学省障害者学習支援推進室委託事業)

## 「インクルーシブ・ゼミの取り組み」

(知的障害者の高等教育・当事者研究・パーソナルポートフォリオ)

株式会社ゆたかカレッジ

顧問 川 口 信 雄

相模女子大学

教授 日 戸 由 刈

## インクルーシブ・ゼミとは

1. 相模女子大学でカレッジ生（1年生）が  
サガジョ生（3年生）と共に学ぶゼミ
2. 大学教員（日戸教授）とカレッジ教員  
（川口）が協働で授業をすすめる

※相模女子大学子育て支援センター事業の  
「インクルーシブ教室」として実施



子育て支援センターパンフレットにも  
インクルーシブ教室として紹介された

## 子育て支援センター ご利用案内



- 子育てに一生ついてみませんか
- 自分の子育てを見つめ直してみませんか
- 子どもの育ち一緒に考えてみませんか



## 子育て支援事業

### お母さんたちの音楽療法

お母さん自身、ダウン症の子供一人に  
対して、音楽療法は特  
殊な効果を持って身体  
機能を促し、幅広い交  
渉力を育みます。学習が  
ランディグループが  
中心になってサポートします。



### 認知症・高齢者のための 子育て支援身体療法

認知力を養って、自分自身や周囲で起きていること  
をありのままに受けとめ、胸の力を働かせて生き生きと  
暮らすこととを目的とする  
プログラムです。音楽療法とそ  
の他の活動とを組み合わせ  
て、子育て中の人々をシ  
スに上手にサポートする力を養  
います。



### 発達体操

発達期の発達段階に合わせて高度  
運動プログラムを行い、環境に対  
する柔軟な行動力、適  
応力、学習能力を高  
めさせていただきます。対象  
は、生後半年から3  
歳児です。



### プレイセンター活動

ニューズランド協会の「子育  
て相談室」運営者、子育て中  
の父母と子ども教育士の学  
習上の協働を期待しています。  
「セッション（学も先  
生も）」、「遊び（学も先  
生も）」、「子育てに関する相互学習」を  
実践し、考えあひ、学びあひ  
育もあひを実践中です。



### ワークショップ

子育てについて自由に語り  
合ふ場です。経験が少なく  
慣れて、経験が豊富なキャン  
パスで「子育て」「心の成長」  
「自分の手のかんじ」などに  
対し、オープンに話します。  
が、臨床心理士の専門家と話し合えます。



### ワークショップトレーニング

仕事でも、家庭でも、地域でも、まわりの人々  
とよい関係を築いていられたいですね。でも書  
き換えてみると「誰かのために感じる」「心  
に届かぬよさやコミュニケーション  
がとれない」と感じることが  
あります。自分の関わりや関係性  
相手との関係を築いて  
いけるコミュニケーション  
スキルを学び、実践し  
ていきます。



### インクルーシブ教室

発達障害の学生（一般大生と同  
年級）を対象に、学校の発達支援形  
態（教育課程と協働）で本格的な  
プログラムの実施を促し、発達障  
害や自立支援をサポートし、社会参  
加の機会づくりを推進することを目  
的にしています。



インクルゼミ

## インクルーシブ・ゼミのねらい

1. カレッジの軽度知的障害や発達障害学生にとって、授業だけでなくキャンパスライフを共有することで、同世代とのやりとりに必要となるコミュニケーションスキル獲得を促す。
2. 相模女子大生にとって、知的障害や発達障害について経験を通じて正しい理解や今後、社会の中で自然にサポートできる力を身につけることを促す。
3. 双方にとって、自分自身をふり返し、自分のことを他者に理解してもらおうとする態度を促すこと、すなわち「当事者研究」の達成である。

## パーソナルポートフォリオと当事者研究

- 自分を知るためにパーソナルポートフォリオ作りを実施する。
- 自己理解の内容としては、好きなもの・関心のあるもの、得意なもの、自分の特性、夢・なりたい職業などを想定。
- 制作過程で自分の悩みや障害について相談し、お互いにアドバイスできるようになる。
- 自己理解を深める一連の学びを「当事者研究」と呼ぶ。

## なぜ双方にとって当事者研究が重要なのか？

- カレッジ生の相談「バイトを首になりました」
- 店長「1か月もたつのになまだ仕事が覚えられないのか。ハイと返事したじゃないか。手を抜いているのだろう」
- 彼は仕事を覚えるのに時間がかかるが一度覚えたらしっかりできる。
- 彼の悩み「自分は障害者なのかそうでないのか？よくわからない。自分の障害を伝えるべきなのか」→自己理解の必要性
- 急速に変化する現代社会においては、大学生も言葉にし難い困りごとや不安を抱えるようになってきており、自分の困難を表現する言葉を持たず、原因もわからないまま社会に出ると、苦しい状況に追い込まれる。つまり、大学生にとっても「自己理解」の深化は必要である。

## パーソナルポートフォリオとは



- ・自分のプロフィールや特徴、実績、夢や願いなどを1冊のクリアファイルにまとめたもの
- ・制作過程で自己理解の深化がはかれる
- ・進路指導や面接指導にも活かすことが可能

## インクルーシブ・ゼミ（春期） 「構成的エンカウンター」

まずは共感関係づくりから

◎カレッジ4人（男2・女2） / サガジョ13人（女13）

第1回（5月24日）

- ①オリエンテーション
- ②なんでもバスケット・バースデーリング

第2回（6月21日）

- ①猛獣狩りへ行こう・新聞紙タワー・大切なもの
- ②ランチミーティング

## 猛獣狩りへ行こうよ 6/21



Nobuo Kawaguchi

9

## 新聞紙タワー 6/21



Nobuo Kawaguchi

10

## 学食&カフェテリア&図書館 5/24



11

## 夏休み期間中のサガジョ生の動き (カレッジには夏休みはない)

- 日戸ゼミ学生のカレッジー日見学会
- 希望学生によるカレッジでのボランティア (延べ人数 約30人)
- これらの経験をふり返り、インクルーシブ・ゼミか幼児支援の2択で希望を取った。人数バランスを考慮し、インクルーシブゼミのサガジョ生は6人に減らす

## インクルーシブ・ゼミ（秋期） 「当事者研究」

◎カレッジ4人（男2・女2） / サガジョ6人（女6）

第3回（9月27日）

- ①秋期のオリエンテーション・パーソナルポートフォリオ
- ②トーキングゲーム

第4回（10月25日）

「好きなもの・得意なもの」について、プレゼン&対話

第5回（11月8日）

「自分のトリセツ」について、プレゼン&対話

第6回（11月22日）

「夢・なりたい職業」について、プレゼン&対話

第7回（12月6日）最終回

相談会：自分の障害や悩みについて相談する。  
（相談者とアドバイザーを両方体験する。）

13

### ④好きなもの・得意なものプレゼン 10/25（サガジョ）



私は仮面ライダーシリーズが大好きで、変身ベルトも持ってます！

14

#### ④好きなもの・得意なものプレゼン 10/25

- 「好きなものや得意なもの」をポートフォリオを見せたり、実演を入れながら発表する  
ダンス・野球・バレーボール・料理
- ディープな趣味やオタク趣味を自己開示し、交流する機会となった
- 「好きなものアンケート」をとり、「私は誰でしょうクイズ」を制作した

#### ④好きなもの・得意なものプレゼン 10/25 (カレッジ)

①皆の好きなことや得意なことを詳しく聞くことができ楽しかったです。外見だけだと何をしているかは分からなかったなので、自分に近い趣味の人もいれば色々なオタクをしている人もいて面白かったです。

②みんなの前でダンスを発表しました。自分は上手く説明ができなかったので、もっともっと人の前でプロみたいに説明ができればいいなと思いました。サガジョの人たちはいろんな夢があっていいなと思いました。私も夢をもてたらいいなと思いました。

#### ④好きなもの・得意なものプレゼン 10/25 (サガシヨ)

①パーソナルポートフォリオ作りをはじめ、自分の好きなことはいくらでも書けるのに、得意なことはほとんど思いつかないことに気付いた。カレッジ生は得意なことをたくさん見つけられて凄いなと思った。自分も自分の得意なことを見つけられるように努力しようと思った。

対等な関係性の中での「学び合い」

②自分が苦手なことを得意としている人もいて、とても尊敬した。自分の好きなものや得意なことをみんなに聞いてもらえるのは嬉しいし、なんとなく自己肯定感が上がった気がした。

### 自己理解支援は入り口が大切

- ・好きなものや得意なものを入り口とし、本人の願いや思いを尊重する自己理解支援をする。（障害受容を目的化しない）
- ・強みと合わせて、自分の苦手や困難に向き合うことを支援する。

## ⑤⑥⑦自分の苦手や困難に向き合う

第5回（11月8日）

「わたしのトリセツ」相談会①

自分の障害や悩みについて相談する。

（相談者とアドバイザーを両方体験する。）

第6回（11月22日）

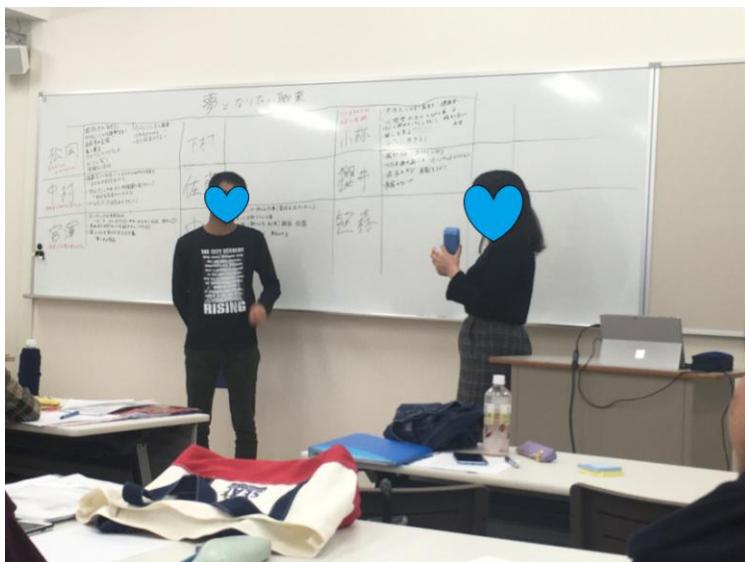
「夢・なりたい職業」について、プレゼン&対話

第7回（12月6日）最終回

「わたしのトリセツ」相談会②

19

## ⑥「夢・なりたい職業発表会」 11/22



20

## ⑥「夢・なりたい職業発表会」 11/22

- 自分の夢やなりたい職業について心を開いて相談する（プレゼン2分 質疑応答3分）  
板書に残し、終了後プリントして本人に配布
- 「なりたい職業や夢が見つからない」といった率直な思いを述べた学生には、「あなたはこういうところが長所だから〇〇みたいな仕事が向いているんじゃない」というアドバイスがあった。

カレッジ生に変化：以前の希望はユーチューバーでしたが、ゼミの対話の中で自分と向き合い、自分に合った仕事は何か模索するようになってきました。

21

## ⑥「夢・なりたい職業発表会」 11/22（カレッジ）

- 皆の夢は明るくてフリーダムなものが多く、自分も明るい夢をたくさん持てるといいなと思いました。将来についてあんまり堅苦しく考えないことも大事だと、他の人の発表を聞いて思いました。ゼミでの新たな発見をこれからも大切にしていきたいです。
- Sさんが親孝行したいと言っていましたが、自分は親孝行したいと思えていなくて、自分は将来親孝行しないといけないなと思いました。りょこうにつれていきたいと思います。

## ⑥「夢・なりたい職業発表会」 11/22 (サガジョ)

- 「夢」と聞かれても最初は全然思いつかなかったが、皆の発表を聞いて、小さな夢がたくさん浮かんできた。自分の夢を話すと前向きな気持ちになれたし、将来就きたい職について受け入れてもらえて自信が持てた。自分には思いつかないような夢を言っている人がたくさんいて、聞くのが楽しかった。お互いの夢や目標を明かし合うことで理解を深めることができ、仲もまた深まったと思った。s i

## ⑦「わたしのトリセツ」相談会12/6



## ⑦「わたしのトリセツ」相談会 1206

### ◎将来仕事についての時に、職場で 困りそうなことについて相談する

ねらい

- ①自分の困りごとについて心を開いて相談する
- ②他者の困りごとを共感的に受け止め、アドバイスする

アドバイスする経験は相談力養成にプラス！

Nobuo Kawaguchi

25

## 「わたしのトリセツ」

1 自分 <small>じぶん</small> の特性 <small>とくせい</small> 自分 <small>じぶん</small> の特性 <small>とくせい</small> として、あてはまるものに☑を入れます。			
<input type="checkbox"/> ものごとを理解するのにかかる時間がかかる	<input type="checkbox"/> 言葉の裏のニュアンスを読み解くのが苦手		
<input type="checkbox"/> 一度に二つのことを指示されると理解できない	<input type="checkbox"/> 自分の気持ちや意見を言葉で説明するのが苦手		
<input type="checkbox"/> 視覚・聴覚・嗅覚など、感覚に過敏性または鈍麻 <small>どんま</small> がある（具体的には： <input type="text"/> ）	<input type="checkbox"/> 相手の名前や顔を覚えることに困難がある		
<input type="checkbox"/> 集中の持続が難しく、見落としや忘れ物が多い	<input type="checkbox"/> 急な変更や予定外の出来事への不安・緊張が強い		
<input type="checkbox"/> 極端に集中して、疲れすぎてしまうことがある	<input type="checkbox"/> 読み・書き・計算のいずれか、または複数に困難がある（具体的には： <input type="text"/> ）		
<input type="checkbox"/> モノの整理整頓やものごとの優先順位付けが苦手	<input type="checkbox"/> 偏食 <small>へんしょく</small> があり、食べられるものが限られている		
2 困りごと 将来仕事 <small>しょうらいしごと</small> についての時に、職場 <small>しょくば</small> で特に困りそうな場面 <small>ばめん</small> と困りごとについて			
どんな場面 <small>ばめん</small> で困るか		具体的にどんなこと <small>こと</small> に困っているか	
①			
3 対策 <small>たいさく</small> とお願い 仕事 <small>しごと</small> についての時に、職場 <small>しょくば</small> の人 <small>ひと</small> にお願いしたい相談事 <small>そうだんごと</small>			
自分 <small>じぶん</small> にできる対策 <small>たいさく</small>		周囲 <small>しゅうい</small> にお願いしたいこと	



⑤「わたしのトリセツ」相談会1108（サガジョ）

自分のことを話すことを通して「話してみるものだな」と思った。何について話そうかと悩んでいる時に「こういうこと？」とか「例えばこういうこととかあった？」など一緒に考えてくれたり、「こういう風にしてみたら？」とか「こういう解決策もアリじゃない？」などと言ってくれたり、「わかる！」などと共感してくれたりして、まるで自分の様に考えてくれているかのように思えて嬉しかった。それらは私が話していなければきっと得られなかった言葉であるため、とても良い時間を過ごすことができたと思う。

社会に出ても相談する原動力に！

29

⑦「わたしのトリセツ」相談会1206（参観者）

まさに、対等な関係で相談し気付き合う姿は自然であり、自分自身の認識を新たにさせていただいたと思っています。また、「お昼ごはんでおにぎりとパン、どちらにするかで悩むよね」というような、日常のたわいない悩みを「そうだよねー」「私も！」と共感し合うことも彼らにとって大切な瞬間であり、共生社会につながっていくことなのだろうと思いながら参加させていただきました。

### ③ランチミーティング9/27



Nobuo Kawaguchi

31

### ランチミーティングには授業以上の効果があった 9/27 (カレッジ)

- 今日、とてもいいけいけんができました。たわいもない話が楽しかったです
- 気軽に雑談する感覚でワイワイすることができました。私は人と話すのが苦手なのですが、皆の話を聞きながら、突っ込んだりすることができて良かったです。

Nobuo Kawaguchi

32

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（カレッジ）

- インクルゼミを受けて、自分が少し変わったと思うところがあります。それは、人に悩みを打ち明けることで周りが共感してくれる喜び、自分の表情が柔らかくなったことなどたくさん変わる事ができました。最初の授業では、ちょっとしたゲームなどで緊張した雰囲気少し落ち着いて、サガジョ生の方も優しくそうな人がたくさんいて安心できました。そして、カレッジに来てくれて、そこで初めて色々な話をする事ができ、自分もだんだん皆といることが楽しく感じる事ができました。ポートフォリオを作成し、発表する頃には、緊張も解け話し合いや発表に対してドキドキすることが少なくなりました。皆の悩みを聞いてみて、「確かに！」と思えたり、趣味の話になると、見た感じだけでは分からない意外な趣味を持っていて面白いと感じたりなど、自分自身がインクルージブゼミを楽しんでいるものなんだと思える事ができました。もうゼミが終わってしまうのは寂しいし、今まで話してきたサガジョ生に会えなくなると思うと悲しいです。自分は友達と別れることに対して寂しいと思うことが少なかったのも、そう思えるということは、皆との距離が縮まった証拠だと思いました。障がいがある無い関係なく楽しく関わることができたのは今回のゼミのお陰です素晴らしい時間を過ごせて本当に良かったです。ありがとうございました。

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（カレッジ）

- 一番感じたことはSさんと仮面ライダーなど趣味の話ができたことで自分との絆や意識を深めることができたとてもいい会だった。
- 10月くらいまで幽体離脱する事がありましたが、最近になってお互いの話題で盛り上がりたりする場面もあって、徐々に減っていったところも成長したところがあってとても嬉しかったです。

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（カレッジ）

- インクルゼミをふり返って、いい授業だと思いました。また来年も受けたいです。最初の方は緊張してたんですが、じょじょに緊張がほぐれてきたので、楽しめることができるようになりました。自分の悩みについて、心を開いて相談することができたので良かったです。また、相談会でリーダーが発表するとき、司会役に自分から立候補できたのも良かった。

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（サガジョ）

- カレッジの皆と会って、最初は何に困っているのか分からなかった。活動を重ねるうち、皆の困りごとがわかってきた。その困りごとは共感できることばかりで、「障害」と名がついても私たちとは違わないんだと思った。ゼミ生同士の新しい発見もあった。自分と全く性格が違い、このような機会がなければ仲良くならなかつたであろうゼミ生に、自分では思いもつかないような切り口からアドバイスもらい、新たな視点で困りごとに向き合うことができた。

## インクルーシブ・ゼミ全体ふり返り（サガジョ）

- トーキングゲームでNさんの「今まで一番怖かったことは？」という質問に対する答えが衝撃的で固まってしまいました。死のうとするほど苦しい思いを今までしてきたのかと思うと時間なんて気にせずもっともっと深く話を聞くべきだと強く思いました。自分の障害のことは周りに話したくないけれど、理解してほしい……。打ち明けた時に受け入れてもらえるかこわい……。とても複雑な葛藤だと思いました。

## インクルーシブ・ゼミ全体ふり返り（サガジョ）

- 初めて会って活動した時、本当にカレッジ生に障害があるのか疑問だった。しかし、活動を通じて彼等には少なからずあるのだろうと思うようになっていた。同時に「ある」からと言って築き上げてきた関係は崩れたりもしないということを確認した。今日の話し合いでも、「障害があることは個性の一つ」「明るい人、ネガティブな人、極度に落ち着きのない人、過集中する人みたいな感じで性格に対する評価名であるだけ」「そういう性格、特徴、個性はそれぞれ違うのだから障害の有無で人付き合いを決めるのは本当に無意味」などの話題が飛び出したが、本当にその通りである。彼等は持っている、私は持っていない。反対に私は持っているが彼等は持っていない。そんなことはいくらでもあったことに気付かされた。今後、彼等と再会する機会があるかは分からない。それでもこの出会いと過ごした時間はきっと互いに特別なものになっただろうと思う。彼等とこうして実際に交流したことで、少なくとも私は距離感、関わり方、そして同じ存在同士であったことを学び、感じ、再認識することができた。私はこれから、できることなら相手がだれであれ相手を知って受け入れることをもっとしていきたいと思った。

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（授業参観者）

- スケジュールの都合で6回目・7回目しか参観できなかったことが残念でなりません。学生たちは、初めからあのように何でも言い合える関係だったわけではないと思います。自分の思いを出し、相手の思いを受け止め、お互いの思いに共感し、言葉をかけあっていく様子・あの日見られた素晴らしい関係が構築されていく様子を継続的に見ていたかと思えました。同時に、そこには先生方が考えられた仕掛けがあることも見たかという思いでいっぱいです。司会を務めた2人の学生の進行も、個性豊かなメンバーのつぶやきも素晴らしいです。自分の思いを受け止めてもらえる・共感してもらえる経験、話してよかった・相談してよかったと思える経験。これらはきっと今後の彼らにとっての力になると感じました。

## インクルージブ・ゼミ全体ふり返り（授業参観者）

- 私はもう何年も発達障害者支援センターで相談業務を担っていますが、大学生や成人の方で、今日のゼミのような水準まで自分のことを語ることができる方にお会いしたことがありません。これは知的水準や学歴では説明できないと思います。この水準まで達するには様々な要因があると思いますが、ぜひまとめて世にだしてほしいです。もう一つはヨコのつながりが本当にすばらしかったです。対等なヨコの関係を構築することがトリセツを作る要因と思いますが、そうしたことも実はまだ世の中では知られていないのです。世の就労支援はいつもタテの関係を学べという事ばかりです。このインクルゼミが本当のインクルコミュニティを作り、人生のQOLを高めるということかと思いました。とても勉強になりました。ありがとうございました。

## インクルーシブ・ゼミのねらいの達成状況

1. カレッジ生：同世代とのコミュニケーションがスムーズになってきた。
2. サガジョ生：知的障害や発達障害についての理解が深まってきた。
3. 双方：自分の良さや苦手などを発見し、自分のことを他者に理解してもらおうとする態度が育ちつつある。

◎現在もサガジョ生によるボランティア継続中。

インクルーシブ・ゼミは大学と福祉事業所がコラボすることにより生まれた、win-winのプロジェクトといえよう。

41

## ゴールはWIN-WIN！

- ともするとインクルージョンは障害者の権利擁護の文脈が強く出がち。
- 知的障害学生が大学での学びでこれだけ成長できた。それはもちろん重要であるが、
- 大学生が知的障害学生と共に学ぶ中で障害理解や自己理解が深まり、大きく成長したと実感できる実践を目指した。

インクルーシブな学びは大学側にもメリットが大きい！

42

これからの日本にインクルーシブな学びは  
必要不可欠である

- 現代日本は脱産業社会であり消費社会になった。又、人口が減り外国人増加していく日本にとって未経験の社会である。
- これからの日本は多様な人が共に生きていくことが必要になる。
- そのためには多様な人が学び合うことや「共にある」という価値に重きを置くことが求められる。

相模女子大学はパイオニア的存在！

## インクルーシブ・出前講座の取組み

株式会社ゆたかカレッジ  
横浜キャンパス学院長 小林 靖

### インクルーシブ・出前講座とは

- 相模女子大学の教員等を「ゆたかカレッジ横浜キャンパス」に派遣し、各教員の専門分野を活かしたテーマで、わかりやすい授業(講座)行う。
- 年間10回(コマ)程度の講義回数
- カレッジでは、AクラスとBクラス別々に実施する。(Aクラス4回、Bクラス6回)
- サブ(支援員)として、カレッジの支援教員や学生ボランティアも一緒に授業に参加する

## 出前講座の実施日時とテーマ

担当講師	開催日	講座テーマ
森平直子教授 (臨床心理学・音楽療法)	Aクラス 7月30日 Bクラス 7月16日	感情の心理学 ～ロールプレイで感情あてゲーム～
小柳玲子先生 (子育て支援センター、音楽療法)	Aクラス 8月6、20日 Bクラス 8月6、20日	音楽療法～楽器演奏と即興作詞で音楽を体感する～
狩野晴子准教授 (障害者福祉・ソーシャルワーク)	Aクラス 8月23日 Bクラス 8月23日	セルフアドボカシー ～さいころトークで自己開示～
伊東俊彦准教授 (哲学・倫理学)	Bクラス 9月17日 Bクラス 1月22日	小さな哲学入門 ～わたしてだれ？じぶんってなに？～

## 感情の心理学

テーマ (ねらい)	感情の心理学 ・色々な感情を理解する ・感情の大切さを知る ・必要に応じて感情を表出する
内容	Bクラス ・感情について、ワークシートに記入し、それを感じたきの様子を語る ・感情当てロールプレイゲームをしながら感情を理解する Aクラス ・パペットを使って、パペットの表情から感情を推理する ・絵の顔から表情を理解する

## 森平直子教授の所感より(Bクラス)

- 感情を感じた時の心身の反応や行動にどう表れるかを訊くと、各自分自身の体験を思い起こしてきちんと言葉で表現することができていて感心した。
- 自分のことを他者にわかってもらおうという気持ちを持っていて素晴らしいと思った。
- 感情の大切さを伝えるという今回の授業の目標が達成できた。
- さまざまな感情を感じたり、悩んだりしている青年達の豊かな内面に触れて、感動した。

## 森平直子教授の所感より(Aクラス)

- パペットの仕草を見て、どんな気持ちなのか考えてもらおうと、すぐにパペットが表現している感情を当てることができ、そこから色々な感情が挙がるようになった。
- パペットは注意を引きつける役割だけでなく、感情について考える良い媒体となった。
- 日頃から、体験を言葉にして認識につなげることができるように促すことや、体験を語ってもらう機会をできるだけ増やして積み重ねていくことが必要なのだろうと思った。職場ではできにくいので、カレッジで学ぶことができることは非常に重要だと改めて思った。

## カレッジ学生の感想より

- 感情は自分の身を守るのに大切だということがわかった。
- 今日は心理学について学びました。具体的に言うと感情とはどういうことについて学ぶことができました。
- しっかりやりました。楽しかったです。
- カレッジ初の出前講座で特別講師・森平直子先生の授業はとても楽しかったです。

## 音楽療法(Bクラス)

テーマ (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"><li>・自分の言葉で作詞をする</li><li>・様々な楽器を使って自由に表現する</li><li>・楽器のアンサンブルを経験し、一体感を味わう</li></ul>
内容 Bクラス	<ul style="list-style-type: none"><li>・パプリカの一部に言葉をはめる(5文字)</li><li>・トーンチャイム(楽器)でキャッチボールのように音でやりとりをする。</li><li>・ギターを演奏する(オープンコードで弾く)</li><li>・歌詞作り。「USA」の歌詞にはめて自己紹介、また学生同士が紹介をしあう。</li><li>・打楽器を即興(曲に合わせて自由に鳴らす)する。</li><li>・ウクレレをオープンコードで弾き、アンサンブルを経験する。</li></ul>

## 音楽療法(Aクラス)

テーマ (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"><li>・共同で歌詞を作る</li><li>・様々な楽器を使って自由に表現する</li><li>・楽器のアンサンブルを経験し、一体感を味わう</li></ul>
内容 Aクラス	<ul style="list-style-type: none"><li>・打楽器を自由に鳴らしたり、指揮をしたりする。</li><li>・歌詞づくり「カレーライスのうた」で具材を歌詞にしてみんなで歌う。</li><li>・トーンチャイム(楽器)でキャッチボールのように音でやりとりをする。</li><li>・視覚指示による合奏を行う。</li><li>・「パプリカ」の一節を卓上ベルで自由に演奏する。</li><li>・のびのび声を出す。</li><li>・合奏「虹の彼方に」「ホールニューワールド」をおこない、アンサンブルを経験する。</li></ul>

## 小柳玲子先生の所感より(Bクラス)

- ・ 楽器経験のある学生や、音楽の好きな学生が多く、ギターの演奏は特に興味が高かった。オープンコード(左手を押さえずによい)設定で演奏してもらったところ、初めは力が入っていたが、特に具体的に指導しなくても、やっていくうちにうまく音が出せるようになっていた。その気になって雰囲気を出して演奏する学生もいた。
- ・ 学生によって、活動の構成の理解や、演奏のコツをつかむのに時間差があるが、個別に指導を加えなくてもやりながら理解をしていった印象。
- ・ 歌詞作りでは「～が好き」「～が苦手」など枠に沿って、フランクに自分を表現していた。
- ・ ウクレレ演奏、興味を持つ生徒が多かった。アンサンブルという点では、楽器と自分の関係に留まる生徒もいた(周囲の音にまで注意できない)。ギターよりうまく音を出すことが難しかったよう。

## 小柳玲子先生の所感より(Aクラス)

- パフォーマンス好きの学生が多く、活気がある。指揮というより踊りやポーズを取るなど表現を楽しんでいた。
- 歌詞作りはかなりヒントが必要だった。
- メロディ奏は積極的に行う学生が多い。
- 音楽好きで知識高くどんどん講師に話しかける学生や、講師の代わりに場面を仕切ろうとする学生、ひとりずつ行う場面で動けなくなる学生など、参加の傾向には幅があった。
- 前回より慣れた印象で、積極的に参加していた。
- ひとりずつの即興演奏は、抵抗なくそれぞれ自由に演奏を楽しんでいた。
- 参加に余裕が出てきたためか、挙手での意思表示や他者への配慮などが増えた。

## 音楽の学びの可能性

- YouTubeなどでの音楽鑑賞は比較的手軽に行えるが、楽器演奏にはそれ以上に他者との共有体験(帰属意識)や自己表現、達成感など社会心理的な充足が得られる可能性がある。
- 音楽の嗜好性が明確になる青年期には、スキル獲得へのモチベーションを保ちやすいため、適切な理解とサポートがあれば継続的な音楽学習(演奏技術の習得)は可能と考えられる。
- 音楽には正誤にとらわれず表現できるという芸術としての特性がある。言語表現が苦手であっても、自分らしさを発揮し認められる経験や、枠組みのない中から自由に作っていく経験、他者と協働する経験など、机上の学習では得られない創造性や対人的交流の場を、音楽活動の中に設定することができる。こうした経験や学びの場面は青年期においても継続することで自尊心や意欲の維持に効果があると考えられる。

## カレッジ学生の感想より(Bクラス)

- 今回の授業では、自分が今まで触れたことがなかった楽器に触れることができました。特に印象的だったのが、ギターをひいたときで昔からずっとかっこいいなあと思っていた楽器だったので、まさかさわることができると思っていなかったのが、貴重な体験ができて良かったです。ベルでは、指揮をしている時が特に楽しかったです。
- 今回の授業では、音楽リョウほうについて学びました。自分はイップスになったときにやったことがあって、とても楽しかったです。また次回もよろしくおねがいします
- トーンチャイムを皆で演奏やりました。私が一番楽しかった楽器はギターとカホンが一番印象に残ります。またカホンの楽器に触れることができたらいいなあ思っております。良い音楽の授業ができて良かったです。

## カレッジ学生の感想より(Aクラス)

- 今日も色々な楽器を使ったり、パプリカを歌ったり、焼きそばの歌ったり、ハンドベルの演奏をしました。今日、来てくださって有難うございました。
- 今日は、がっきあわせてとてもすてきなきょうたいけんをさせてもらいありがとうございました。うたのかしづくりでは、ちょっと子供の曲でしたので、こんどは大人っぽいうたのフレーズを私は大人っぽいフレーズをかいてみます。
- この間、やった最初はタイコやギターを弾いたり後はカレーの歌を歌ったり、ハンドベルで君をのせてを歌ったり最後にラツパなどを吹きました。来てくれて有難うございました。

## セルフアドボカシー

テーマ (ねらい)	みんなで知る見るプログラム サイコロトーク
内容	<ul style="list-style-type: none"><li>・みんなで知る見るプログラムってなに？というワークショップについて理解する</li><li>・みんなで守るルールを確認する</li><li>・サイコロトークをやってみよう！</li></ul> 「お互いのことをよく知る、いいところを見つける」 <ul style="list-style-type: none"><li>・ワークショップの感想を話し合う</li></ul>

## 狩野晴子准教授の所感より(Bクラス)

- 授業の内容に興味を持てる生徒とそうでない生徒が混在するため、展開の難しさを感じた。
- 授業中は誰一人として離脱してしまうことはなく、参加することができていた。
- 障害について話し合う場面では、自身の体験をもとに、葛藤、思いを伝えることができていた。障害によって苦労したことは一般的に語りにくい失敗経験となりがちだが、客観的な視点を持ちつつ語ることができ、かつ、どのような支援があれば助かるかということまで言及できたことは素晴らしい。
- 自己理解、自己覚知が進んでいると感じた。

## 狩野晴子准教授の所感より(Aクラス)

- 調子が優れず不安定になっている生徒もいたが、ほとんどの生徒はプログラムに乗って参加することができていた。
- カードに書かれた質問に答える形式で授業が進むが、ほぼ全員が質問に答え、自分の意見を発表することができたのは、評価すべきことである。
- メンバー間でうまく発言できないメンバーの発表を補ったり、発言を促したりといった助け合いがあったことも印象的であった。
- 授業を終える時もまだまだ話し足りない様子が見られ、自身の生活や障害、将来について彼らが話しあう機会が少ないのではと考えさせられた。
- 日常的にどれだけ話ができているのか、それが意思形成に重要な要素となるのではないか。

## カレッジ学生の感想より(Bクラス)

- 今日の授業でお互いのことを知ることができました。普段はなかなか自分について話す機会が無いので、自分のことについて話したり、他の人の話を聞いたりすることができて楽しかったです。今後社会に出るときも、自分は普通じゃないことを相手に理解してもらうことが大事だと思いました。
- 今日の授業では、セルフアドボカシーについて勉強しました。自分には障害のことで苦しんでいることをみんなに伝わっていただければいいと思いました。
- 私は、あまり皆さんの前で障害について、あっさり教えました。普通の人にこれから障害について話しているのか分からなくなりました。まあ、自分としては、障害があったとしても、ありのままにいたいと思っています。人の話を聞いてちがう考えがあるんだなと気づけて良かったです。

## カレッジ学生の感想より(Aクラス)

- 今日の授業でわかったことがありました。私は、嵐がなんのためにアイドルをしているのかを知ることができました。大ファンの人たちもいたり、それ以外の人たちのためにうたを作り、うたってくれているんだなあとはそう思いました。
- さいころころがしました。たのしかったです。うれしかったです。

## 伊東准教授

テーマ (ねらい)	小さな哲学入門(哲学対話) ～わたしってだれ？じぶんってなに？～
内容 (Bクラス)	1回目 ①「哲学」という学問の大まかなイメージ （「当たり前を問い直す」）を持ってもらう。 ②「哲学」的な思考の実践（「問い、考え、 語る」）を体感してもらう。 2回目 ・「自ら問い・考え・語る」という哲学的思考 の実践を試みる

## 伊東俊彦准教授の所感より(Bクラス)

- 初めての哲学対話にしてはかなり積極的な発言があり、その内容も、そこから思考を深めていく材料になりそうなセンスのある発言が多く、面白いものだった。
- やり方によってはもっと対話の内容を深めることもできるかもしれない、それだけの力がある生徒たちだと思われた。
- 授業の参加者と輪になって、哲学対話形式で「わかりあう」とはどういうことなのかについて、身近なことに題材をとりながら考察を深めた。前回に引き続き、こちらの期待以上にしっかりと考え語るということに真剣に取り組んでくれたことは嬉しい驚きだった。
- 「わかる」という単純な言葉の中にも、様々な意味や役割があることを感度良く気付き、それを言葉にしてくれており、私にとっても刺激になる哲学対話の実践となった。

## 哲学的対話のエピソード

- クラスの仲間が何を話しているか一見「わからない」ような時でも、その人と普段接していればちゃんと「わかる」。
- 親は自分の考えていること、感じていることをよく「わかっている」とは思うが、その「わかっていること」が逆に自分にとってうざったいこともある。

## カレッジ学生の感想より(Bクラス)

- 哲学というのをテーマにいろんなトークなどをしました。これからの将来にも身に付けるようなことを学ぶことができ、貴重な体験ができました。
- 哲学について何となく分かりました。よく哲学的に考えると、かそういうのは聞いたことがあったのですが、自分で考えようとする、答えが浮かばず、難しいものだと思います。でも自分が当たり前のように知っていることをさらに考えてみる、ということはしたことが無かったのですが、今日学んだことを思い出して、さらに追求してみるのも面白いのかなと思いました。
- 自分とは何なのかの授業を受けました。その授業内容はとても難しかったです。
- 今日の授業で哲学のおもしろさが分かりました。また、先生の授業を受けたいと思いました。

## まとめ①

- 自ら知的障害者に対する授業に興味関心を示していただいた大学等の先生方ということもあり、どの先生方も内容・方法を工夫して望んでいただけた。
- Aクラス、Bクラスの学生の様子については、カレッジから説明をさせていただいたが、あとは特に助言することもなく、自ら工夫して授業を作って実践していただけた。
- どの先生方も授業の手応えを感じており、自分の専門分野で知的障害者等が学ぶ可能性について一定の理解を示した。
- 基本的には、時間的な制約があって、どの講座も1～2回に限られたため、学生の変容や授業の理解度についてはっきりしなかった。しかし、どの学生も意欲的に参加し、またその授業を受けたいと感じていた。
- 今後、大学(高等教育)の中で知的障害者等が学ぶ授業のモデルになった。

## まとめ②

- カレッジの学生は外部講師(大学等)の先生の授業をととても楽しみにしていた。
- 専門分野の内容であっても、わかりやすく優しく工夫することで、学生たちからパフォーマンスや意見・考えを引き出すことができ、自主的・対話的に考えることができた。
- 今後、複数回同じテーマで授業を行うことで深い学びにつながるのではないかと考えられる。
- 今回はたまたま自分を開示したり、自分のことを表現する授業が複数あった。自分の障害や弱みについて正面から考えるきっかけにもなり、自己理解が深まった。
- 高等教育的なテーマや内容でも、授業の工夫を行うことで、カレッジの学生たちも学ぶ意欲をもって十分参加することができた。